

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 おおいし さとこ 大石 紗都子

本論文は昭和十年代の堀辰雄の創作活動において、日本の古典文学と西洋文学の影響がどのように融合し、それが戦時下においていかなる意義を持ち得たのかを実証的に明らかにしたものである。

構成は三部からなる。まず第一部では西洋文学との関わりを中心に、『風立ちぬ』と『美しい村』が検討の対象に選ばれている。『風立ちぬ』においては、夢見る「私」とそれを批評する「私」が交錯する中で、「死」の不条理を語ることが「生」のありようを追求することにもなる、という逆説を、リルケの『レクイエム』から学んでいった経緯が明らかにされている。また、『美しい村』においては、「芸術家」としての自身の存在意義を塗り替えていくそのありように、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』からの影響が指摘されている。いずれも堀の蔵書の書き込みから明らかにされたもので、その検討を通し、孤独を保守することこそが人間の紐帯のいしずえになる、という思想が導き出されている。

第二部においては、『曠野』『娼捨』の二作を対象に、堀の依拠した『源氏物語』『伊勢物語』『更級日記』の蔵書の書き込みが検討されている。『曠野』の主題は、これまで孤独の一貫性や献身の純粋性に求められてきたが、これに対して本論は、不条理を通して生の代替不可能性、一回性を描出することにこそ堀が古典から学んだ本質があるのだと主張している。また同時代において『更級日記』は私小説的な性格が評価されていたのに対し、堀の独創性は、彼岸と此岸のはざまに佇むモチーフに注目した点にある、と指摘されている。『娼捨』に関しては、夢への憧憬と現実との止揚、というモチーフが『更級日記』『源氏物語』、リルケの『ドウィノ悲歌』等の読書体験から形成されていく過程が検討されており、東西両文明が一人の作家の中で融合し、あらたな意味を持ち始める契機を具体的に明らかにした点に本論の独創性を評価することができる。

第三部は亀井勝一郎ら日本浪漫派との関係を中心に、昭和十年代における「古典回帰」の意味が考察されている。本論によれば、不条理の持つ意味を虚構を通して明らかにしていく発想において、堀の文学は初期の日本浪漫派が持っていた問題意識と多くの共有点を持つのであるという。ただし、日本浪漫派が次第に「死」を絶対化し、賛美する傾向を強めていく中で、堀の場合は逆境ゆえに主体性を獲得していく「永遠女性」を理念とし、「死」を想うことが孤独な「生」を鍛えていくことになる、というテーマを育んでいった点に特色があり、この点で両者は大きな相違点を持つのであるという。

総じて、当該のテーマに関してなお論じられるべき作品が残されている点は勘案しなければならないが、堀の日本古典文学の受容は単に同時代の古典回帰の風潮に追随したのではなく、東西文化の融合した、独自の批評性を勝ち得たものであった点を明らかにした点は高い評価に値する。

以上の点から、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。